

開催趣旨

マルトリートメントとは、身体・精神・性虐待・ネグレクトを含む児童虐待を広くとらえた、虐待とは言い切れない大人から子どもへの発達を阻害する行為全般を含めた不適切な養育を意味します。つまり虐待とほぼ同義ですが「子どもの心と身体の健全な成長・発達を阻む養育すべて含んだ呼称」であり、大人側に加害の意図があるか否かにかかわらず、また、子どもに目立った傷や精神疾患がみられなくても、行為そのものが不適切であれば、それは「マルトリートメント」と言えます。しつけと称して脅したり、暴言をぶついたりといった心理的・精神的な虐待も含まれます。子どもと関わる多くの大人が自分は児童虐待と無関係だと思って見過ごし、日常的に不適切な接し方で子どもを傷つけてしまっている可能性もあります。

本シンポジウムでは、マルトリートメントがどのように子どもを傷つけているのか？脳の部位によって委縮したり、肥大したりするなど物理的な損傷を与えていることについて、またその傷を負った脳・こころへのケアについて、さまざまな現場でご活躍中の先生方にお話しいただき、主に、マルトリートメントにより傷ついた子どもと家族へのケアについて議論を深めていきたいと思っております。

COVID-19 パンデミックの影響で家族が共に過ごす時間が増えている昨今、マルトリートメントが増加しているという報道があります。新緑がまぶしい季節ですが、この重大な課題に目を向け、ともに学び合う機会にできましたら幸いです。

シンポジスト



友田明美先生

(福井大学子どものこころの発達研究センター教授・小児神経科医)

熊本大学医学部卒業、熊本大学を経て福井大学子どもの発達研究センター教授。小児神経科医。心の発達にひずみを抱える子どもとその家族と向き合い、多領域と連携しながら子どもの育つ力を支援されています。虐待が脳に与える影響について研究し、「子供の脳を傷つける親たち」(NHK出版新書)など著書多数。文部省の平成27年度いじめ対策等生徒指導推進事業実施にかかる9大学連携事業福井校代表。



森野百合子先生

(成増厚生病院成増子どもの心ケアセンター準備室長・精神科医)

日本医科大学医学部卒業、国立精神神経センター武蔵病院にて精神科研修後、東京都立東村山福祉園、日大板橋病院等を経て、渡英。モーズレイ病院等にて家族療法を学び、ロンドン大学キングスカレッジにて家族療法修士、2000年に英国精神療法協会公認家族療法士。その後、ロンドンにて公立の児童精神科医療サービスに従事、帰国後は東京都立小児医療センターをベースに、児童虐待の困難事例の治療に尽力されています。2021年より現職。



三柘優子先生

(平塚児童相談所 児童心理司・公認心理師)

筑波大学人間学類卒業、同大学院人間総合科学研究科修士号取得。神奈川県の子童相談所に11年所属され、主として児童心理司として勤務。児童相談所では虐待への緊急対応及び、バウムテスト3枚法を使うことで、子どものこころを読み取り、子どもと家族のこころを癒し、家族再生の道筋へいざなう細やかで温かい臨床に日々尽力されています。



上別府圭子

(一般社団法人 子どもと家族のQOL研究センター代表理事)

東京大学医学部保健学科卒業、同大学院にて保健学博士。虎の門病院、こどもの城小児保健クリニック、兵庫県立女性センター、東京慈恵会医科大学病院、東京大学医学系研究科健康科学・看護学専攻教授を経て現職。家族形成期からの児童虐待予防をライフワークにしています。